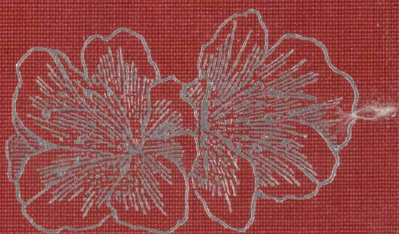


男の償い花



古屋信子全集 4



男の償い
花

吉屋信子全集 4

男の償い 花

定価 二五〇〇円

昭和五十年八月十五日発行

著者 吉屋信子

装幀者 中島かほる

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 清美堂製本株式会社

発行所 朝日新聞社 東京・大阪・名古屋・北九州

第四卷 目次

男の償い

花

あとがき

男の償い

昭和十年七月——十二年六月「主婦之友」

若き考古学者

滋は汽車から降りると、歩廊に立って駅の向うの山を眺めようとした。あいにく眼の前の列車が邪魔になって、瑠璃子から教えられた、目じるしの分譲地の立札が見えなかった。

で、いったん改札口を出て、乗合自動車のひしめく広場を右手へ歩いて、線路越しに向かいの山の方を眺めると、（清風園分譲地）という立札が、松や杉の生えている山腹に見えた。

分譲地の看板を目あてに、停車場の横のガードをくぐって、左の坂道を登ってゆくと、和光荘という表札のかかった、ブルジョアの似非風流の別荘と申すものが存在しております。そこが、スナワチ私どもの、今年ただで拝借した避暑（？）（だって昼は暑いんですもの）のお家ですの。

お母様へ孝行のためにも、ちょっとぐらいは、こちらへも、いらっしゃるものよ。

これが、昨日届いた瑠璃子からの熱海風景の絵葉書への文面だった。滋は、それで思い立って、今日ここへ出かけ

て来た。

滋と瑠璃子は俗に言うハトコの間柄だった。滋の母と瑠璃子の母は従姉妹同士だった。

滋の母の糸子は、女学校の裁縫手芸の先生を勤めて、独身のまま三十過ぎてから、中学教師の文学士伊狩雅人の後妻となって結婚し、先妻の子の生さぬ母となると共に、実子滋を生んだ。

三十幾つになってからの初産で、とてもひどい難産だったが、年齢下の従妹の勝恵が産婦人科の医師に嫁いでいたお蔭で、その良人安倍医学士の処置と手当によって、母子共に九死に一生を得たのである。

それゆえ、いわば、滋に取っても、母の糸子にとっても、安倍夫妻は生命の恩人とも思えるので、この両家は今に至るまで、親しくつき合っている。

滋の父の雅人が、滋が大学に進む頃に亡くなつて以来は、その生命保険金や、生前編纂した国語参考書二、三からの印税や、未亡人の糸子が教師勤務中の貯えやらで、どうやら滋が大学を今年出るまで続けられたのである。

滋は卒業後も、自分の希望の考古学の研究を離れず、考古学の専門雑誌の編集を手伝つたりして、ほんの僅かな月給で、ほかに思わしい就職口もなかった。

異母兄の猛は、生さぬ仲の糸子が、人知れぬ苦心と、心づかいのうちに育てたにもかかわらず、中学卒業後は上の学校に進む気もなく、自分から望んで、株屋へ奉公した

り、炭山や鉦山の事務員を転々したり、異母弟より五つ上の、いい男の年齢をしながら、いまだに身も定まらず、最近では満洲に一族あげると言つて、継母から旅費をせびつて、行つたまゝろくに便りもないのである。かくて、糸子の老い先のただ一筋の頼みは、実子の滋一人だったが、それも、非実用的な学究を望むので、物質的には恵まれるはずはなかった。

それに引きかえ、糸子の従妹の勝恵は、良人の昌平が二十何年も変らず勤めてゐる大きな病院の産婦人科の古参で、とうとう博士にもならずじまいの万年医学士のままだが、臨床では経験も積み患者の信用もあり、相当財も蓄めて、兄妹二人きりの子供の滋より二つ上の長男一男を柏林に去年留学させたほどの余裕も出来て、今は一男の妹の美しい娘の瑠璃子を掌中の玉と愛でて、兄息子の博士になるのを楽しんで待つという——糸子から見れば、羨ましい境遇だった。

その勝恵が、今年、良人の患者で懇意になった、某実業家夫人が、この夏は新築の新那須の別荘へ行くとかで、熱海の別荘は夏は使わぬゆえ、もし、およろしかったら、御自由にお使いくださいと、言われて、温泉へ入るのが、三度の御飯より好きだという勝恵は、喜んで、それを拝借に及んで、娘の瑠璃子と共に、女中を連れて先日から熱海に来て、良人の昌平も、時々病院の休日に通つて来るのだったが、そんなことで、親しい間の糸子も、保養にやつて来

てはと招待されて、未亡人で滋や生さぬ仲の息子を抱えて、温泉など、この数年行つたこともない乏しい生活の糸子は、喜んで出かけて行つたのである。

滋は一人留守番をして、もとより女中も使っていない、三間ほどの狭い古びた借家、柏木の家に、朝は紅茶とパン、昼は出先の考古学雑誌の編集所でライスカレーのたぐい、夜だけは近くのアパートに、学生時代から結婚して棲んでゐる友人のところへ行つて、母の留守中だけ食事の世話になつて、ここの一週間あまり、そうした不自由な生活を続けていたが、ちょうど編集の用も片付き、印刷の校正も一段落したところへ、瑠璃子からの絵葉書で、かねがね自分も行く約束をしていたこととて、今日こうしてぶらりとやつて来て、瑠璃子の知らせた通り、分譲地の看板を目当に駅の傍の広いガードをくぐつた。

冬の熱海が避寒の地だけに、夏はたしかに、涼しいとは言えぬ、真昼の日盛り、その殺風景な灰色の生々しいコンクリートのガードの下へ入ると、埃を含んだ生ぬるい空気が、墓のようにべったり身にまつわる。そこへ、ガタガタとトラックや自動車、後から前からやつて来る。

やつとガードをくぐり抜けて、左手の坂道を登ると、山の中腹を開墾して分譲地にしたらしい、その辺一帯、見上げるような石垣で築かれて、そこへ夏の太陽が反射して焼けつくようだ、水をかけたら石垣がジュッと音を立てそうなど……

そして、その坂道はジグザグになって、もう一曲りも二曲りも続く——だが（暑い）ともつぶやかず、滋は黙々として坂道を辿る。

その滋の姿は、英ネル青灰色の夏服の胸釦もはずさず、バナナ帽のその鰐の蔭に、肺を病んで亡くなった父の雅人によく似た面影の、濃ゆい眉の凛々しい清澄な眼の大きな、恰好よく高まった鼻梁と、喘ぐ如き暑さの中にも、意志強げに堅く堅く閉じた、少し大きな、けれど上品な男の唇とを持った、二十四、五歳の智的で純潔な青年にのみ見られる、激しい意力と純な初々しい情感の秘められた顔が、空からか、つとさす陽の中にも、静けさを保って、この眉うら若き考古学者は、もう幾つかの坂道を上へ上へと、曲るに沿うて登ってゆくのだった。ステッキはないが、その片手にメロンの包をさげているのである。

その道ばたの石垣をめぐらした別荘の門ごとに、滋は澄んだ眼をあげた。（和光荘）の門標を見落すまいと注意したのである。

かなり高く坂道を登り詰めたと思った頃、その角の石垣の上から地に影を落している、幹の幾抱えもある老松の下に、クリーム色の日傘がちらりと見えたと思うと、

「あら、いらっしやい！ 滋さん！」

と、訝え渡る声がした。この時ばかりは、一陣の涼しい風が、松の梢にさつと渡ったかとはかり、滋は蘇ったように、ほっとして立ち止った。

「瑠璃ちゃん！」
彼は日傘の主を呼んだのである。

瑠璃子

「今日なんて、すぐといらっしてくださるかどうかと思っ
てましたわ……」

と、滋の傍に、いそいそと近寄って肩をならべ、華奢なそのバラソルを滋の方に傾けて、瑠璃子は彼の顔に微笑んだ。

「昨日から当分ひまだから、やって来たけれど、瑠璃ちゃん、東京とおんなじくらい暑いや」

滋は言った。

「ホ、、だから熱い海と書くじゃありませんか。でも、朝晩はやつぱり海の風が通ると、少しは違ってよ」

瑠璃子が朗かに笑った。お納戸地のじょうがの単衣に、白に銀系のさや形の夏帯を、きりりしやんと締めている。

その襟元に少し見せた夏襦袢の襟は、純白な縦紋、衣紋は抜かず、堅気な山の手のお嬢様スタイル、顔はほどよく小麦色で締って、頬と唇の仄かな紅化粧だけ、白粒気はみじんもないが、自然の若さの溢れた皮膚と美しい輝く眸が生々として、清楚に装えば装うほど効果をあげて、いい形の眉がその双眸にせまって見えるのも、インテリ娘の気の勝つ

た個性をはっきり示して、美しいなかにも、そこに昔の女性にはなかった、或る鋭さや、茶目ッ気や、批評的精神とでも言うような神経が感じられて、確かに近代の生んだ若い女性美を表現している娘だった。

年齢は滋より四つほど下で、去年女学校を出ると、津田英学塾へ、この春予科を終って、今本科一年生の夏休暇中の瑠璃子である。

「お母さん、どうしてます？」

と、滋がならんで歩きながら問うと、

「小母様ともお元氣よ、毎日お母様とお湯へたくさん入る競争よ、一日に五度も六度も——ホ、、、、年齢とるとあんなにお湯っていいものかしら？ 私なんか、温泉なんて意味ないと思うけれど——」

瑠璃子が答えた。滋が、すると、

「ハ、、、うちのおふくろ、ただで温泉へ入れると思つて、むやみと浴びてるんだな、ちと卑しいな」

「ホ、、、小母様は無邪氣なのよ。そこへゆくと、うちのママさんは浅ましいわ。ただで温泉付き別荘が借りられるとなると、有頂天で出かけて来て喜んでるなんて、さもしくって……」

「ハ、、、おたがい、おふくろに対しては辛辣だな」

二人が声を合せて笑って、その二、三步、瑠璃子がバラソルをついとつづめると、

「ここよ、滋さん」

と、大きな自然木の門の前に止まった。

「なるほど、これがただ借の御別荘か」

と、滋が門内の数寄屋造りの一構えを眺めると、

「駄目よ、そんな口の悪いこと、うちの母さんの前で行ったら、たちまち御機嫌損じてよ」

瑠璃子がちゃんと注意した。

「大丈夫さ——その点心得てるとも」

そういう滋の前を一足先に駆けぬけ、瑠璃子は軽い羅の袂を匂いやかに振って、玄関に——

「小母様！ お母様！ 滋さんが今いらつしてよ！」

彼女は若やいだ声張り上げて、注進に及んだ。

そして、後から入って来た滋が、靴を脱いで上るのを待つて、帽子を受け取りながら、

「あら、生意氣ねえ、バナマなんて——」

と、両手でくるりと廻すと、

「なに、黒須先生のお古拝領さ——奥さんが、僕にはカンカン帽は似合わないって、それを賜わったのさ」

黒須先生とは、考古学界の権威、文学、理学の二つの博士号を所持して、滋の大学時代からの恩師である。今の勤め先もこの博士の推薦で入ったので、滋は常に出入りしている。

「ホ、、、でも、その夏服は御新調でしょう、素敵よ」

瑠璃子は、また、ひやかした。

「あゝ、これ、おふくろが代金払ったの」

滋が、ちよつとてれて微笑——

「ホ、お帽子は先生の奥様から、洋服はお母様から——それじゃ、滋さんの自力のものは、そのお頭の内容だけね」

と、みんなと瑠璃子に一本やられて、滋が思わず、そのいわゆるお頭を掻いた時——奥からどやどやというほどでもないが、女中を従えて賑やかに、瑠璃子の母の勝恵に滋の母の糸子が出て来た。

「まあ、まあ、この日中に着いたんじゃ、さぞ途中がお暑かったでしょうね」

と勝恵が、

「でも、若い者が車に乗る道程でもなしね」

と糸子が、ここ四、五日別れていた息子を懐かしそうに見やうて、

「まあ、早速お風呂を戴いて、汗をお流しよ」

と言うと、すかさず瑠璃子が、

「そちら、問題の温泉よ。ホ、」

と、滋と眼を見合せて笑い出した。

「え、何が問題ですって？」

勝恵が聞きとがめると、

「なんでもないこと、ホ、」

瑠璃子はいち早く逃げてしまった。

心理学ノート

母の礼讃する、いわゆる、その温泉を湛えた湯槽に、ざあ——とつかって、面倒そうにすぐ出た滋は、お客様用に出された浴衣に着替えて、海をはるかに見渡す階上の広間へ上ると、さっき彼が土産に持って来たメロンが切られて、冷い紅茶のコップなどが出ていた。

そして、母の糸子ひとり、団扇を片手に坐っている。

「瑠璃ちゃんたちは？」

滋が問うと、

「あなたが来たんで、晩御飯の御馳走につて、お台所へ応援に出かけたようだよ」

糸子が告げると、

「それは感心だな」

「ほんとに瑠璃ちゃんは感心よ。今日も、もしかしたらつて、汽車の着いたたびに、その辺まで出かけて見たりしてね」

母に言われて、さっき瑠璃子が日傘をさして、坂道の途中で自分を見つけたのは、そうだったのか——と滋はそんな自分の来るのを待ってくれた瑠璃子の気持が嬉しかった。

そんな風に、言わず語らずのうちに、二人が恋心地にな

っているのは、もうこの一年このかたのこと……暗黙のうちに、二人は一生を共にする望みを懐き合っていた。

「あんたも四、五日は、ゆっくり遊んで行けるのだろうね」

「えい、そうしましょう」

「そしたら、母さんも一緒に帰りますよ」

そんな会話を母と息子で交しているうちに、はるか海辺の、日本画の風景の題材にもってこいの、紺青色の海の岩のあたりが、西日にうす赤く染って、おいおい日暮はせまった。

糸子は、夕御飯までに、もうひと浴びしようと、湯殿へ降りて行った。そのあと、ぼつんと残された滋は、退屈まぎれに、二階の廊下を散歩して、ゆきつもどりつしている、その客間と次の間の横手に小さい四畳半の部屋があるので、ちょっと覗くと、経机めく二月堂の机が置いてあり、その上に、不似合なノートや英語の本が無造作に載せてあった。朱色の万年筆もころがっている。

(瑠璃ちゃんの御勉強部屋だな)

と、ついと入って、悪戯気からノートを一冊取り上げる、Tsuda College の印刷された鼠色の表紙に、心理学、

牛島講師——本科一年B組、安倍瑠璃子、と記してある。

表紙を開くと、最初の頁に、心理学トハ一口ニ云イ得ナイ学問デアル。然シ人間ニツイテノ研究トデモ云ウノガ最も至当デアル。心理学トハ、抑々ギリシヤ時代ニ遡ル学

問デアッテ——

滋が面白そうに微笑して、ここまで筆記の文字を読んで行つた時、

「あらッ」

と、悲鳴に似た叫び声をあげて、いきなり背後から、瑠璃子の両腕が烈しい勢いでノートを引ったくった。

「ひどいわッ、ひどいわッ、人のノートをこっそり見たりして！」

夕化粧の仄かに匂う顔が、滋の眼近くは、つたと睨んだので——

「やア、失敬失敬、退屈だったんで、つい——ハ、ハ、ハ、だが、どうして偉いもんだな、心理学とは抑々ギリシヤ時代に遡る学問であつて——か」

「ずいぶんね、知らないッ」

瑠璃子は、はにかみながらも、怒って見せて、ツンと横を向いた。

「君の学校って、英語ばかり詰め込むのかと思ったら、心理学の何のって、なかなか堂々たるお講義があるんだね」

「ただし、考古学なんて、お生憎様、なくなつてよ」

瑠璃子が負けていない。

「ハ、ハ、ハ、なくなつて仕合せさ。考古学トハ、抑々人類の過去追求ノイザラ学問デアル——と筆記されるからね」

滋が笑うと、瑠璃子は真顔になつて、

「いやよ、ひやかしちゃ、私、これでも、真剣で勉強してるのよ、滋さんのために——」

「なに？ 僕のために？」

滋が瞬間、腑に落ちなかった。

「私、学校出たら、女学校の先生になるのよ。どうせ、滋さんの月給は当にならないんですもの。石器時代の遺物なんて、いじくっている学者に、食べさせていただくわけには行かないわ……」

「うーむ、女って現実的だな」

と滋は、うわべは何気なく言ったが、男の自分が漠然と彼女との結婚を夢見ている時、もう女性の彼女は、さきの先まで、その二人の実生活の設計に思いをめぐらしているのを、今ぴしりと知らされて、みごと一本参った形だった。

しっかりして気の勝った利口な瑠璃子に、もうすっかりリードされているのを、しみじみ滋は覚った——

「僕だって男だ。結婚したら、食うだけの責任は持つさ——」

と、彼が言い放った、とたん、階下から女中があがって来て、

「御食事のお支度が出来ました」
と報じた。

「ホ、ホ、当分は二人とも、この通り食べる心配なしよ。ホ、ホ、さあ行きましょう」

快活に瑠璃子が、未来の良人の肩を軽く叩いた。

未来の良人、しかして未来の妻！ のこの二人も、それは、単に二人だけの胸と胸との誓いだけだった。まだ、その父、母たちに公表して、はつきりと許された形は取ってなかった。いずれは——必ずその運びに到る決心は、二人とももちろんしていた。だから、つつしみ深く、どんな二人だけの機会にも、まだ唇一つ許し合ってはいなかった。

その夜の客

滋と瑠璃子と、その二人の母たち、四人の夕御飯が終つて、

「あとで、海岸通りまで、ちょっと散歩しましょうか」

と瑠璃子言い出して、皆そのつもりでいるところへ、玄関へ人の気配がした。

「お父様かしら、ふいに今夜いらっしたんじゃない？」

瑠璃子が気がるく立ち上った時、女中が入って来て、

「堤さんが、お見えになりました」
と告げた。

「あら、いやだ」

立ちかけた瑠璃子が眉をひそめて、また坐りなおした。

「早く、お二階へおあげして」

勝恵が、はずんだ調子で女中に命じ、自分も身づくろい

して立って行く。

「堤さんで、いったい何です？」

滋が瑠璃子を見た。

「あのね、この近くの別荘の人よ。お金持で、田舎の多額納税者なんですって。お母さんがここへ来てから、お知合になったのよ。ちよいちよいお話にいらつしやるのよ——」

「フーン」

滋は、多額納税者なんて石器時代になかったものだし、興味もなさそうにした。

「お客様は、別荘地社交係の母さんに一任して、私たちは海岸の方へ降りてゆきましょうよ。ねえ滋さん。小母様もよ、御一緒に……」

と瑠璃子は、滋と糸子をうながして、食事の部屋を出ようとした、そのやさき、また女中が入って来て、

「奥様が、お嬢様、皆様にお二階へいらつしやるようにと——」

「なぜ、私たちこれからお散歩よ」

瑠璃子は不満らしく、つぶやいたが、二階の階段の上から、勝恵の声が響いた。

「瑠璃子、折角堤さんがお越しなのに、引込んでちゃ失礼ですよ。滋さんも連れて、あがっておいで——」

「いやアねえ」

瑠璃子がちよつと首をすくめて、拗ねた。

「瑠璃ちゃん、まあ、散歩はあとにしましょうよ」

と糸子が、それを宥めるようにして、自分が先に立って階段をあがった。

仕方なく瑠璃子も、

「滋さん、じゃあ、しばらく私たちとつきあって頂戴」

「うん」

二人とも、二階の客間へ入った。

——地方の多額納税者など言えば、相当年輩の男かと、滋は思っていたのに、さて客間へ入ってゆくと、そこに、蚊がすりの薩摩上布を着て角帯を締めた、若い、滋と同年輩ぐらいの青年が客だった。

「これが、従姉の倅ですの」

勝恵が紹介した。瑠璃子も糸子も、もうすでに、客の堤とは知り合っていた。

「やア、僕堤です」

改まったように、堤は綺麗に分けた頭髮の頭をさげた。女の肌のように、白くてつやつやした顔で蕩児のように妙に感覚的の眼つきをしていたが、滋と全然型こそ違うが、なかなか身じまいのいい美男だった。

「大学はどちらで」

滋をまだ学生と見て取ったらしく、堤はすぐそんな風に話しかけた。

まだ学生風の滋に比較して、同じ年輩でも、堤はすでに世の中も女も遊びも金儲けも何もかも知っている、大人に見えた。

「大学は今年出たてのホヤホヤでございます、ホ、ホ、ホ、」
 勝恵が社交的な笑いを景品にして、滋に代って、いち早く答えた。

「やア、それは失礼、たいへん僕なんかより年齢下にお見受けしたんで、ハ、ハ、ハ、」

堤が、つまらぬことに笑った。

「ホ、ホ、ホ、まだ書生さん同様でございますよ。それに、この人は中学四年で、一高へ入りましたので、卒業も早い方で——」

と、糸子が、ちょっと自慢と報告を兼ねた。

「ホウ、それは秀才ですね。僕なんか、中学生の頃、親爺に死なれたお蔭で、それから金の番人に仕込まれてしまつて、一向無学で、なんとも——」

堤が言うと、勝恵が慌てて、

「いいえ、そんなことは決してございませんよ。何も堤さんのようなお方が、わざわざ大学をお出になって月給取りにおなりになる必要は、少しもございませんもの、ホ、ホ、ホ、」

と、煽^{あお}てるように団扇^{うちわ}で風を送った。

「でも、この子なぞ、まだ月給らしいものも、ろくに戴^かけません学問で——」

糸子が、大学は必ずしも月給取るための最高学府でない意味を、いささか述べた。

「ホウ、すると、何が御専門で——」

と、お金にならない学問を、堤は珍しげに問うた。

「考古学！」

瑠璃子が、これまた滋の代弁をした。

「考古学、ハア、その、それは、つまり、なんですかな

ア……」

堤は、むしろ無邪気だった。

「滋さん、堂々と説明なさいよ」

瑠璃子が、かざした団扇の蔭から、微笑んで滋を見やると、

「ハ、ハ、瑠璃ちゃんの心理学のノートでゆけば、考古学トハ一口ニ云イ得ナイ学問デアル——か、ハ、ハ、ハ、」

滋は、茶化して笑って、真面目に堤に答えようとしな

い。

「つまり、あの、大昔の石器時代の遺物などを掘り出しま

してね、それを研究するんでございますの」

糸子が、息子に代って一言した。

「なるほど、そうした古物の御鑑定を——それは面白いでしょうな。僕も郷里^ドの邸には、亡くなった親爺がたくさん古い仏像を買い込んだのを、持ってますが、中には地から掘り出されたものもあるそうでしてね、小さい仏像一つで何千円も出して買ったものもあって、その中に一つ二つ国宝ものがあるかも知れんと思ってますが、一つ今度御鑑定をお願いしましょう、是非」

堤はこう言つて、シガレットケースから一本を出して火

を点けた。

「僕は骨董屋じゃありませんから、そのお役には立ちませんな」

と、そつげなく滋は言い放つと、いきなり立ち上って、

「僕これで失礼、疲れてますから……」

と、言うなり、客間をどんどん出て行つた。

——衆子が、困つたように、

「あの子は、学者肌で偏屈で——」

と、その場を取り繕つた。

いさかい

滋は、折角頭を休めに、そして瑠璃子と語り合ひに、出かけて来たのに、その最初の晩から、無智な俗物の堤のような客と、応対するのが、ばかばかしくて、やり切れず、彼の一本調子の、確かに我儘な神経にさわたってしまつて、さつさと、客間の愚かな会話から逃げ出して、階下の庭に向かう縁側の籐椅子に、一人で倚りかかつていた。

二階の客間から、何が面白いのか、女たちの笑声がする——それを耳にすると、滋はいらいらして来た。

（小母さんも瑠璃ちゃんも、母さんまで、なんだって、あの男を取り囲んで、いつまでしゃべっているんだ、女って莫迦だなあ）と腹が立つにつけ、勝恵も瑠璃子も自分より

も、あの堤という金持の青年をチャホヤして歓迎しているような気がして、自分一人除け者にされたようで、ひがみずにはいられたかった。

そこへ窺やかな足音がして、瑠璃子が近づいて来た。

「滋さん、こんなところにいらっしゃるの。ごめんなさい、お客さんのお相手させたりして——」

彼女は、滋の神経が、愛すればこそ、何もかもよくわかつていた。

「いったい、なんだって、あんな俗物と喜んで交際してるんだい」

滋は叱りつけるような語調だった。

「何も、私喜んでしてるんじゃないかってよ。こちらへ来たら、自然にお知合いになって、時々いらっしゃるから、お話のお相手するのが礼儀でしょう」

「フン、そんな、退屈な礼儀なんて、僕は真平だ。瑠璃ちゃんなんかは、やっぱり、金のある男に媚びるんだらう。

それが女の本能だから——」

滋はひとりぼっちになっていた苛々しさから、ハツッたりを恋人にした。

「まあ、失礼ね。それが女の本能だなんて——滋さん、そんな口の利きかたなされると、まるで堤さんに嫉妬を感じていらっしゃるようで、みっともないわ」

瑠璃子も少し感情を害して、争わずにはいられたなかった。府立第五出で英学塾本科一年生の彼女は、恋人にも、